学びや タイムスリップ

⑯ 大原の画仙人・小松均 （昭和時代）

力強さ表現 地域の宝に

左京区にある小中一貫校・京都大原学院には宝ものとして伝わる美術品があります。1枚は立派な赤富士を描いたもの（写真①）、もう1枚は勇猛な牛を描いた作品（写真②）です。

これらの作者は大正から平成にかけて活躍した画家の小松均で、大原に住み、その風景を多く描きました。1902（明治35）年山形に生まれ、23歳のとき、展覧会で知遇を得た土田麦僊に師事するため京都に出ました。ある時、麦僊に紹介され大原の地を訪ね、その豊かな自然に魅せられたといいます。

その後、この地に移住することを決意しました。俗世や画壇のしがらみから離れて、清らかな水、美しい合歓（ねむ）の木に囲まれながら、畑を耕し、鶏を飼って自給自足の生活を送りながら絵を描き続けるためでした。長い白髭（ひげ）をたくわえたその姿も相まって、「画仙人」と呼ばれ、大原の人々に愛されました。

大原に小学校が開校したのは1875（明治8）年のことです。ここは山間部でしたが、寂光院や三千院など歴史のある寺院が多く、江戸時代から寺子屋によって子どもの教育は熱心に行われていました。その寺子屋の流れを引き継ぎ、郡中小学校として出発し、1949（昭和24）年京都市に編入されました。75（同50）年には創立100周年を迎え、その記念にと小松から「赤富士」を寄贈されたのです。

富士は小松が多く描いた画題でした。雄大な姿が力強く濃い墨線でかたどられ、強烈な赤の色彩が見る人を圧倒します。牛図もまた、即興的な墨線が生命の力強さを表しています。大原を愛した画家小松均のことは、こうした作品とともに小学校や地域全体で伝えられていくことでしょう。

写真1、小松均「赤富士」（1975年ごろ、京都大原学院蔵）

写真2、小松均「牛」（昭和時代、京都大原学院蔵）

（京都市学校歴史博物館学芸員　森光彦）